

ふるさとのお話

病気をなおす神様

宮下の伊勢塚さん

宮下には、「お伊勢塚」さんといって、病気を直す神様が祀られています。昔は、多くの人がお参りに来ましたが……。

これは、宮下に住む佐野さんが、子どものころ、よくお年寄から聞かされた話です。

病気の旅人が……

いつごろのことかわからんけどな、昔な、いくんちもいくんちも雨の日が続いたことがあったそうだ。

そのころあ富士川は、渡し船でこの岸の岩淵へ渡ったもんだけどな、みやあんち(毎日)雨だもんで船場あ旅人でいっぱいあて、宮下まで来たんだって。そのころのたびや(旅は)難儀だったようだ。その中でな、お伊勢参り途中の1人の重い皮膚病をもった年寄がいたそうだ。

あんまり汚にやあもんでな、どこかの家でも泊めちゃあくれにやあので、雨に打たれて、とほとぼ杖を頼りに宮下村まで来てな、ある家のとば口に立ってなあ、「ひと晩とめてください」と頼んだそうだ。その可哀想な姿を見て、情け深いその家の人達は



語ってくれた人
佐野忠夫さん(66歳)
宮下

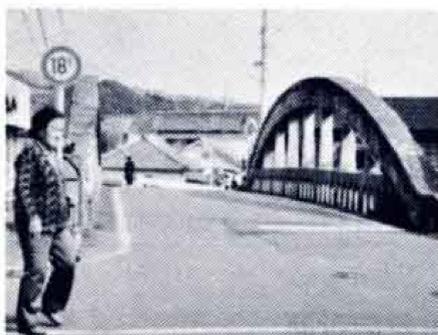
気持よく泊めてやってな。やれお風呂だ、ぬくてえおかゆだ、とそりゃあ親身に世話してやったそうだけんだなあ、なにしろひどく病んでいる上に、雨に叩かれて何日も歩いて来たもんでなあ、身体が弱ってしまったのだな。とうとうそれから間もなく死んでしまったそうだ。

死ぬ時にな、「どうか私をここへ祀ってください。そうすれば、今後私と同じ病で苦しむ人たちを救ってあげられる…」こう言い残したので、その家の人をはじめ、村の人たちが力を合わせて、そこへ祠を建ててやったと。

この欄で昔話を語ってくれるお年寄りを探しています。あの人を知っていそうだという情報でも可。連絡先は市役所広報広聴課 ☎51-0123(内線528)

地名の由来

須津



須津橋

明治22年3月中里村・長沢新田・川尻村・神谷村・増川村・江尾村が合併して須津村が誕生しました。

須津の津は港つまり船着場のことで、須という字は待つという意味ですから、須津とは船を待つ所となります。浮島沼周辺の村人は長い間船が唯一の交通機関で、沼は自分たちの庭でした。須津村を構成した村々もそれぞれ船着場がありました。

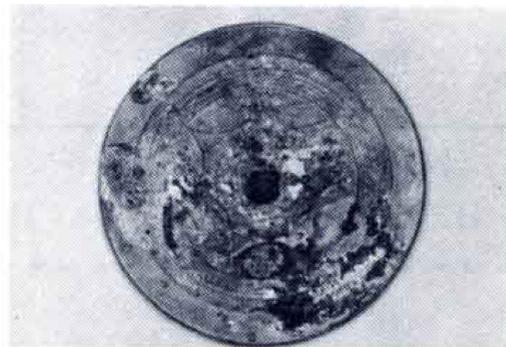
郷土の遺跡 人々の生活

東坂古墳出土の鏡

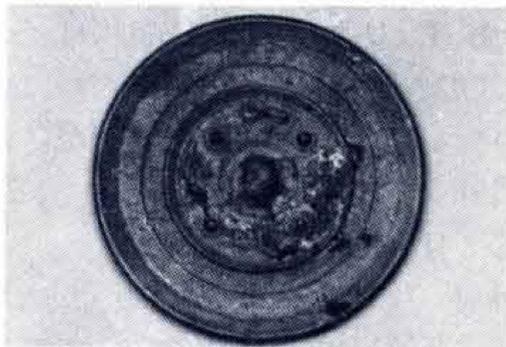
県立吉原工業高校敷地内には「東坂古墳」と呼ばれる前方後円墳がありました。この古墳は、5世紀初め頃に造られた古墳で、遺骸のそばには鏡・剣・玉などが埋葬されていました。

鏡は、弥生時代から地方の首長のあかしとして、中央の政治指導者から贈られたもので、権力の象徴を意味しました。中国では実用・芸術品として使われていたようですが、農業を中心として生活していた日本には、太陽を司る「カミ」がいると考えられていました。

鏡は、この太陽の光を受けて幻想的な輝きをつくることから、神の化身としてあがめられ、神格化したようです。東坂古墳から出土した2枚の鏡も、神として信仰され、これを持つ首長は「スルガの王」として絶対的な「力」を持っていたと考えられています。



ないこうかもんきょう
内行花文鏡



しじゅうきょう
四獣鏡